

鳥栖市の装飾古墳

鳥栖市教育委員会



田代太田古墳



ヒャーガンサン古墳

装飾古墳とは、古墳の埋葬施設に彫刻や彩色による絵画や文様が描かれたもので、全国で約800基が確認されており、そのうち約500基が北～中九州地域(福岡県・佐賀県・大分県・熊本県)に分布しています。それ以外では関東北部・東北南部の太平洋側(茨城県・福島県)に分布するほか、鳥取県・香川県・神奈川県などにもあります。これらは4世紀から7世紀にかけての時期に築かれていますが、5世紀中頃～7世紀前半に築かれたものが大半を占めます。

装飾古墳は当時の人々の死にまつわる思想や儀礼を考える上で重要な学術資料ですが、とくに彩色による壁画は原始美術としてもきわめて貴重な文化遺産です。鳥栖市内にはその彩色壁画系装飾古墳(壁画古墳)が田代太田古墳(田代本町)とヒャーガンサン古墳(弥生が丘七丁目に移設)の2基存在します。

田代太田古墳とヒャーガンサン古墳は、その立地・規模からみて鳥栖地域の6世紀後半代(1,450～1,400年くらい前)の豪族とその一族の墓(首長系列墳)であろうと考えられます。付近には剣塚古墳・岡寺古墳・庚申堂塚古墳などの前方後円墳が分布し、当時この地域に勢力を持った豪族が幾世代にわたり墓を造営していたことがわかります。

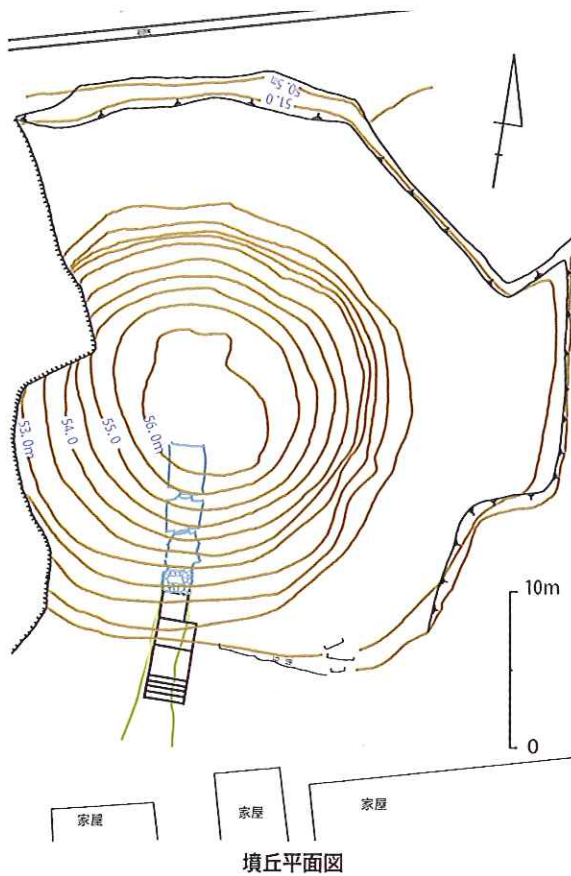
田代太田古墳の数十年後にヒャーガンサン古墳が築かれていることがわかっており、田代太田古墳は九州における彩色壁画の最盛期、ヒャーガンサン古墳は彩色壁画が終息する時期のものといえます。

田代太田古墳

国指定史跡

所在地 鳥栖市田代本町太田1370

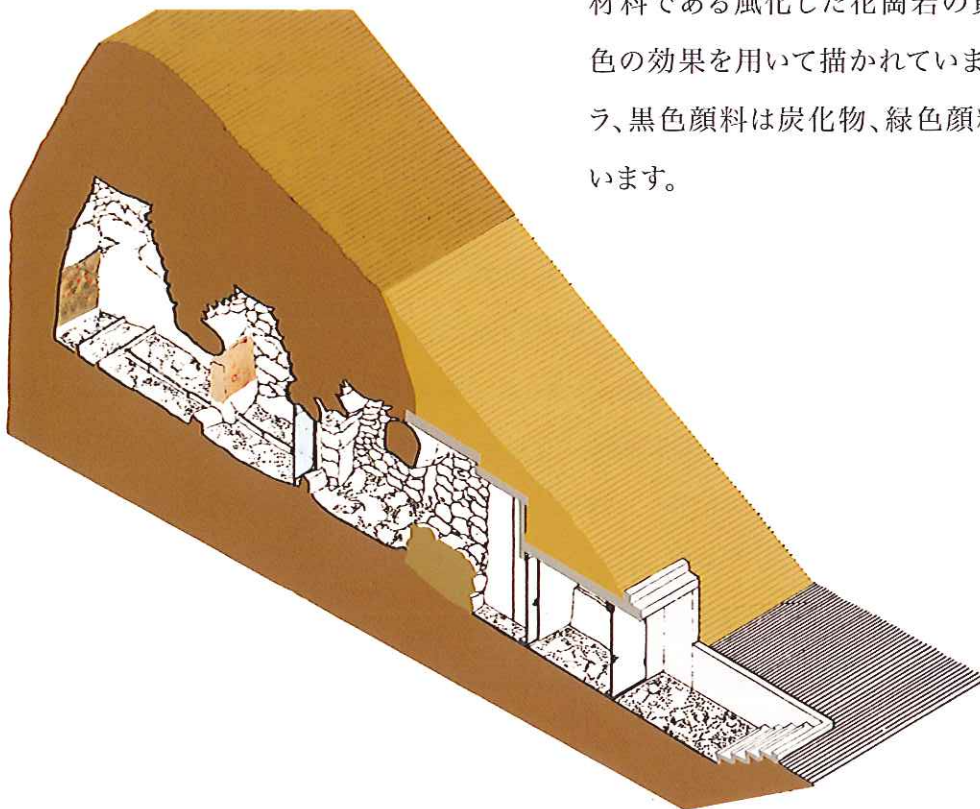
指定日 大正15年11月4日



鳥栖市田代本町太田に所在する田代太田古墳は、古墳時代後期(約1,450年前)に築造された径約42mの大型円墳です。彩色壁画系装飾古墳として早くから知られており、1925年(大正15)に国の史跡に指定されています。

2段に築かれた墳丘は高さが現状で約6mあります。主体部は全長約9mの横穴式石室で、入口は南に開口しています。前室、中室、後室の3室からなる珍しい構造をしており、とくに中室と後室の天井部分はドーム状に石材が持ち送られています。後室の高さは約3mあります。被葬者を安置するスペース(屍床)は後室に3体分、中室に2体分が設けられています。

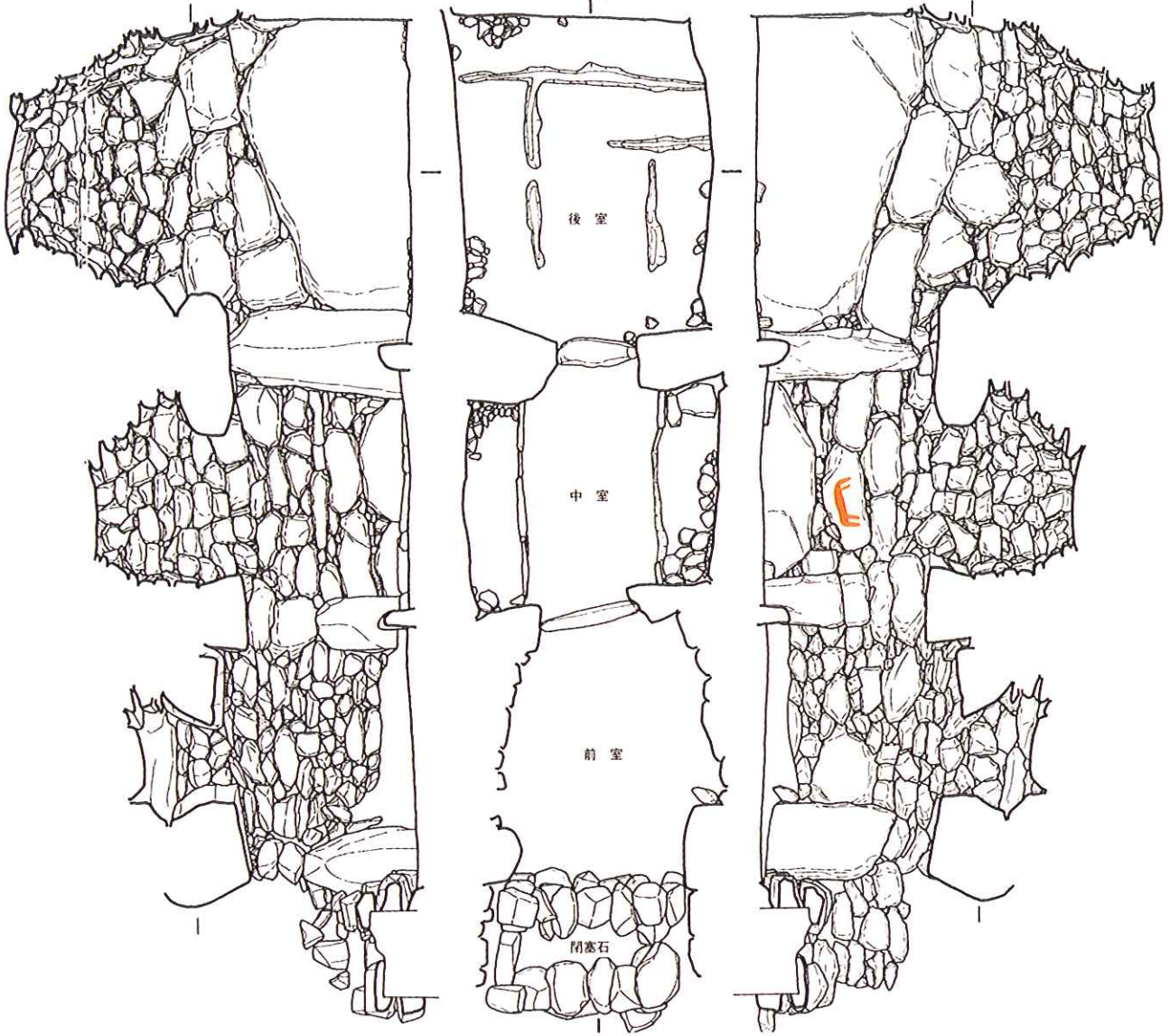
装飾文様は後室奥壁と、後室と中室の間の張り出した石(袖石)の手前部分と中室右側の壁に描かれています。壁画の彩色は、赤・黒・緑の3色の顔料に、石室の材料である風化した花崗岩の黄色い岩肌を加えた4色の効果を用いて描かれています。赤色顔料はベンガラ、黒色顔料は炭化物、緑色顔料は海緑石を使用しています。



石室整備状況断面図(■は整備時の盛土)



0 3M



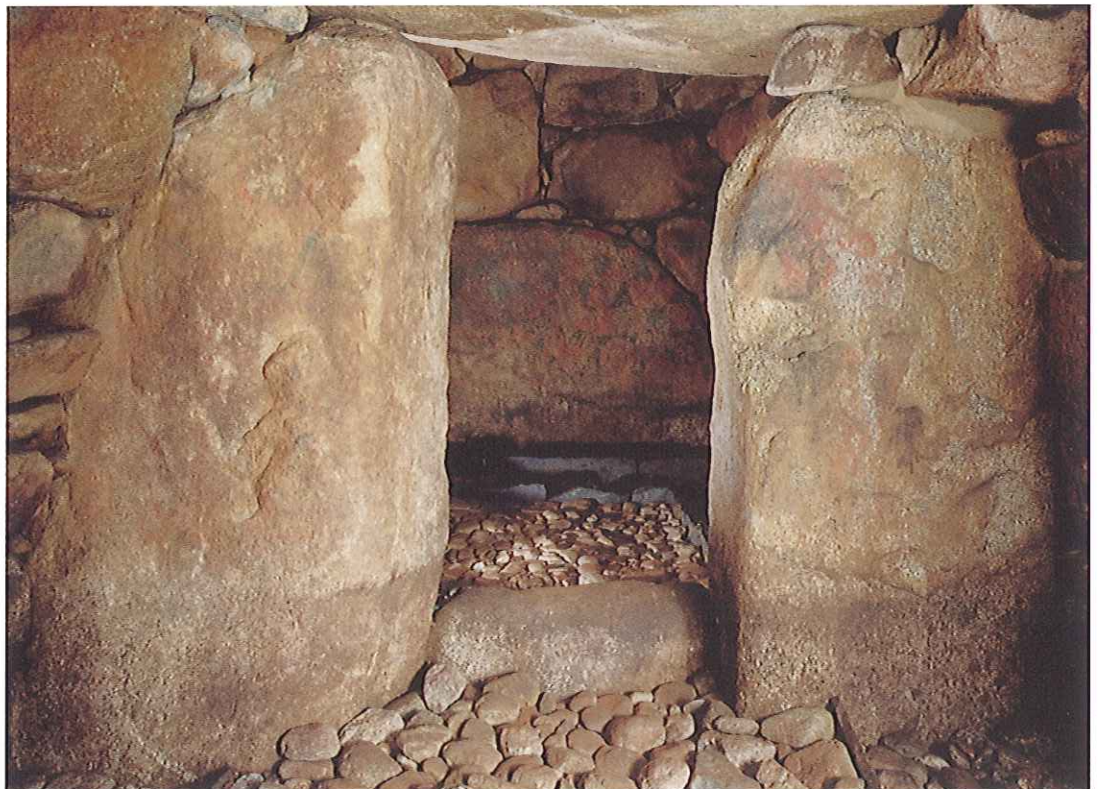
田代太田古墳石室

※床面は調査時の状態。現在は、敷石等を配置して築造当初の状態に復元しています。

後室奥壁の壁画は、幅約2.3m、高さ約1.1mの腰石(石室の壁に使われている石のうち一番下にあるもの)に、背景として三角形を連続して描いた文様(連続三角文)を描き、中央部分に円を何重にも描いた文様(同心円文)を4個配して、これらの間を埋めるように、花弁の内部に緑を入れた花文や、手を挙げて
いる人物(挙手人物像)や馬に乗った人物(騎馬人物像)、渦巻きのように描かれている文様(蕨手文)、
船、高杯を配し、最下辺右側には4個の盾を並べたように描いています。



奥壁(上)
中室から玄室をみ
る(右)



また、後室と中室の間の右側袖石には同心円文や弓を引く騎馬人物像が描かれ、左側袖石には同心円文・船に乗った人物・盾・高坏らしいものが、中室の右側壁にはゴンドラ舟が描かれています。

これらの構図の特徴は、連続三角文や蕨手文などのような抽象的な文様と人物像のような具体的なものを巧みに配し、一種の物語を表現しているかのようにおもわれます。連続三角文については、ヘビなどのウロコを象徴化したものと考えられています。ウロコには魔除けの意味を込めたのでしょうか。また、4つの同心円文は大きさや色彩構成がそれぞれ異なり、同心円文が太陽を象徴したものと考えると、全体で四季を表現しているのではと想像することもできます。

1975・76年(昭和50・51)に、壁画を保護する目的で、石室を密閉して気温・湿度の変化を安定させる保存工事が行われました。また、1959・60年(昭和34・35)には、日本画家の日下八光(1899～1996)により壁画の模写(現状および復元)がおこなわれました。現在一般に知られている田代太田古墳の壁画イメージはこの日下画伯による復元模写図からきています。



壁画復元模写



玄室袖石壁画(入り口側)復元模写



中室右側壁の装飾文様

ヒャーガンサン古墳石室

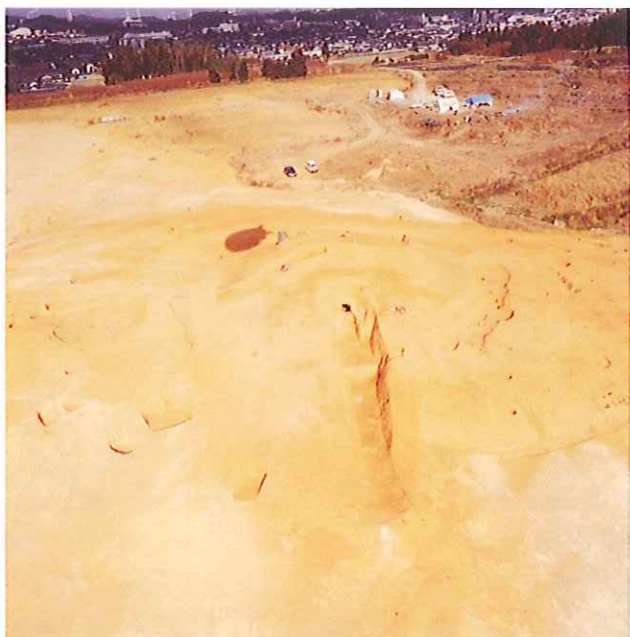
鳥栖市重要文化財(考古資料)

所在地(移設地) 鳥栖市弥生が丘七丁目五番地(梅坂公園) 指定日 平成16年4月19日指定

ヒャーガンサン古墳は、鳥栖市と基山町の境界近く、ハツ並金丸遺跡の標高56mの丘陵に所在した古墳時代後期(約1,430年前)に築造された古墳で、鳥栖北部丘陵新都市(弥生が丘)造成に先立って平成10～11年(1998～99)に発掘調査が実施されました。現在は元の位置から約700m西方の梅坂公園(弥生が丘七丁目)内に移設されています。石室部分が平成16年(2004)に鳥栖市重要文化財(考古資料)に指定されました。

古墳の形は円墳です。周溝に囲まれた盛土による墳丘は直径20m、高さ2mくらいですが、石室の床面から墳頂までは5m近くあり、半独立丘陵頂上部の立地とあわせて、墓道から古墳を見上げたときに、丘陵上部を含めて径40m以上の大型円墳に見えるように工夫して築造しています。移設された現在も正面階段下から見上げると同様の視覚効果が得られるように復元整備しています。

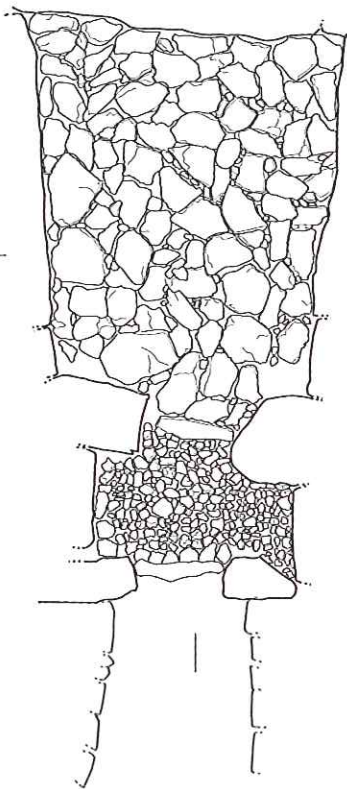
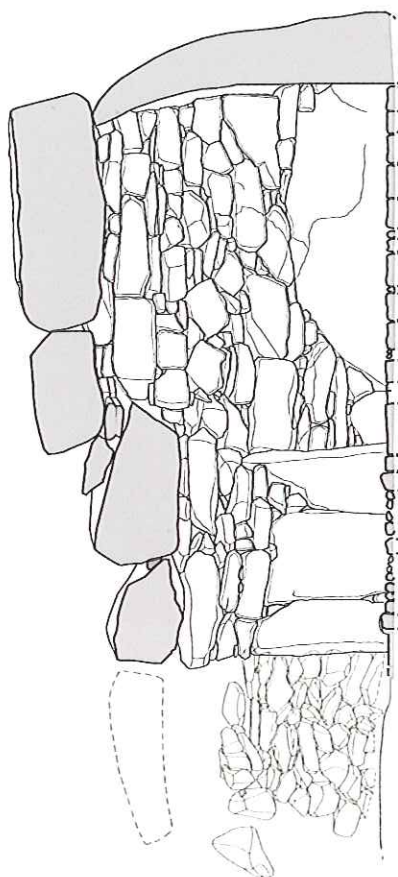
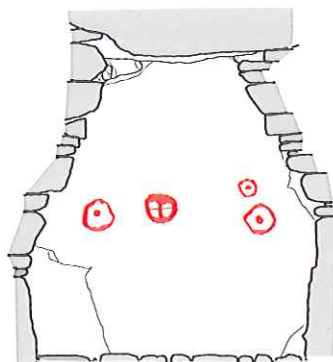
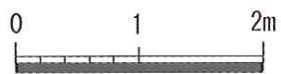
主体部は南南西に開口する複室両袖型の横穴式石室です。全長4.8m、玄室長3.1m、最大幅2.2m、最大高2.2mです。平面プランは玄室がほぼ長方形、前室は横長の長方形です。遺物は、石室内で須恵器・土師器と鉄鏃・馬具の破片が出土したほか、墳丘南西部および石室の入口付近(前庭部)で墳丘築造の祀りに用いられたとみられる須恵器・土師器が出土しています。平成14年(2002)に移築復元工事が実施された際に、側壁の崩落・欠失した部分については新たに石材を補充して築造当初の状況に復し、床面についても石を敷き詰めた初葬時の状態に復元しました。石室の主軸方位および床面の標高についてもほぼ当初の状態に合わせています。ただ、前室入り口の外側に施された石積み(羨道および前庭部側壁)については、見学口を広くする必要から復元していません。



発掘調査状況(平成10年)



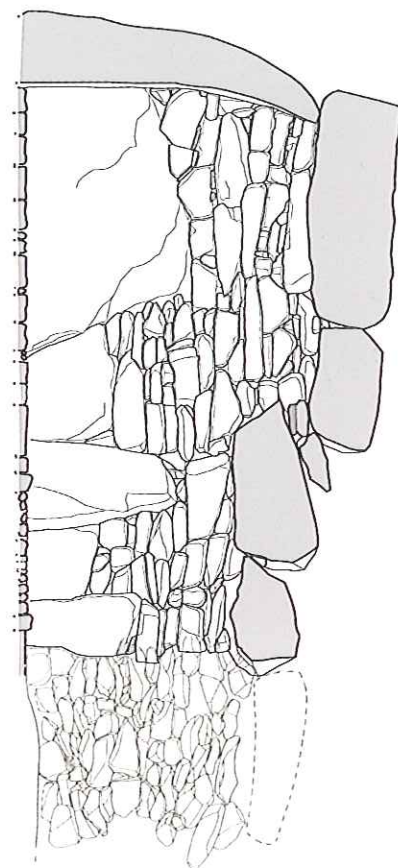
移設・復元整備状況



玄室

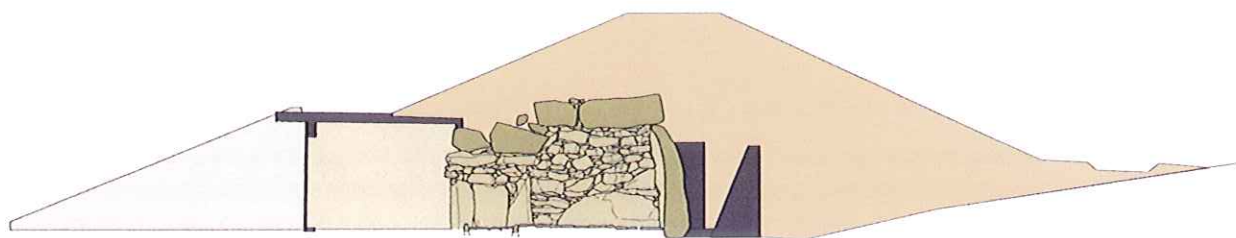
前室

(羨道)
せんどう



ヒャーガンサン古墳石室

※移設後の状況。羨道及び前庭部側壁は省略して復原しています。



墳丘・石室断面図(移設復元整備状況)



石室奥壁の装飾文様

赤色の装飾文様は、石室の奥壁(2.5×2.5m)にベンガラを使用して描かれています。中央には径約25cmの円文中に十字文を配した文様が位置し、左側に径25cm、右側には径15cmと25cmのいずれも中心部に点が付された円文が配されています。これ以外にもベンガラが付着して装飾文様が描かれているようにもみえるところがありますが、不明瞭で判然としません。赤色顔料による単色の彩色壁画という点で、同時期に築造された神崎市に所在する伊勢塚古墳の石室奥壁の装飾文様(円文か)との類似が指摘できます。



神崎市伊勢塚古墳の彩色壁画(「佐賀県・長崎県の装飾古墳」)

なお、古墳の名称である「ヒャーガンサン」という地名(しこ名)については、「灰岩山」・「拝願山」の字を当てて由来とする説があります。その他、かつてこの場所にあった木を切り倒して運びおろしたところ、足腰が立たなくなって這うことしかできなくなったため、「這わせる神様(ハウ・カンサン)」という意味でこの名がついたともいわれています。